

Uima Nakai ウンゼンザサ l.c. **46**: 47 (1932). *Athyrium Tashiroi* Tagawa ウスバヘビノネゴザ 植分 **2**: 21 (1933). *Viola Greatrexii* Nakai et F. Mack. ウンゼンスマレ 東亜図 **1-6**: pl. 3 (1935). *Aruncus silvester* var. *tenuifolius* Nakai ウスバヤマブキシヨウマ 植研 **13**: 387 (1937). *Adenophora remotiflora* forma *leucantha* Honda シロソバナ 植維 **57**: 107 (1943). *Peracarpa carnos*a var. *pumila* Hara ツクシタニギキョウ 植研 **21**: 21 (1947). *Heterotropa unzen* F. Mack. ウンゼンカンアオイ 植研 **27**: 326 (1952).

植物 [羊] ヒメスギラン, マンネンズギ, ツクシノキシノブ, ツヤナシノド, オオクボシダ。[裸] カヤ, ツガ。[単] タシロノガリヤス, コウヤザサ, コイワカンスゲ, ミヤマイワスゲ, ツルナシオオイトスゲ, ヒメジュズスゲ, ヒナスゲ, ツクシテンツキ, ナガハمامシグサ, ツクシマムシグサ, ヒメテンナンショウ, オキナワホシクサ, ヒメナベワリ, カンザシギボウシ, マイヅルソウ, ツクパネソウ, ナガバシユロソウ, キクバドコロ, ヒナノシャクジョウ, シロシャクジョウ, ナゴラン, ヒナラン, ナツエビネ。[離] ハシカエリヤナギ, ノグルミ, ブナ, サンショウソウ, クロフネサイシン, ツクシアオイ, ヤマグルマ, タカネハンショウヅル, トリガタハンショウヅル, シギンカラマツ, オオヤマレンゲ, シロモジ, ケクロモジ, カナクギノキ, フウロケマン, モウセンゴケ, ツクシネコノメソウ, イワネコノメソウ, タチネコノメソウ, ジンジソウ, ツルジンジソウ, テリハイワガラミ, ツルキンバイ, ナンキンナナカマド, ハネミイヌエンジュ, ヒナウチワカエデ, コミネカエデ, アオカヅラ, ネコノチチ, ヒコサンヒメシヤラ, モミジウリノキ, ツクシキョウカツ, ミツバグサ, ヒカゲミツバ。[合] シャクジョウソウ, マルバノイチヤクソウ, レンゲツツジ, ヒカゲツツジ, ヤクシマホツツジ, シロドウダン, ベニドウダン, クロミノサワフタギ, ツクシトネリコ, アオカモメヅル, ツクシガシワ, タニジャコウソウ, ムラサキテンニンソウ, アキチヨウジ, ツクシコゴメグサ, ミヤマムグラ, ニシキウツギ, モミジカラスウリ, ソバナ, オオバヨメナ, ツクシコウモリソウ, ニシノヤマタイミンガサ, ツクシヤマアザミ, クサヤツデ, ハンカイソウ, ニシノメタカラコウ, ツクシトウヒレン。(国立科学博物館)

○高等植物分布資料 (33) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (33)

○ミズスギ *Lycopodium cernuum* L. の関東地方における産地として箱根大湧谷(牧野: 本誌 **6**(6), 1929, 鎌倉(久内: 本誌 **26**(8), 1951), 三浦半島(奥山: 植物採集ハンドブック, 1953), 茂原(長柄村)(千葉県植物誌, 1958) が知られているが, 武蔵野の狭山丘陵にも生育している。1962年8月に若い株を得, 11月に孢子のう嚢をもった標本を得て, ミズスギであることを確認した。生育場所は山口貯水池の西側で, 道路に沿ってつけられた溝の斜面に, 長さ約 3.5 m 幅約 20 cm にわたって若いゼンマイ, ドクダミ,

ヤマツツジ、ナツハゼ、ウツボグサなども混生し、さらに 5 m, 10 m はなれた所に一株ずつ生育している、草丈は 5 cm 程度である。斜面は南向で冬はよく陽が当たるが夏はゼンマイ、ススキ、トダシバ、コマツナギ、ヤマツツジなどに覆われて暗い。後背はアカマツの疎林でコナラ、ネムノキ、ネジキを混生し、道の向い側（南側）はスギの植林で暗い。この道路は陸地測量部の1916年の地図には載っていない。おそらく山口貯水池の完成（1934年）前後に作られたものと思われるので、ミズスギもそれ以後に生えたものであろうか。（東京薬大 生薬学教室、指田豊）

〇オオヤマフスマ *Moehringia lateriflora* Fenzl は山地生の植物で、武蔵野での記録はまだないようであるが、狭山丘陵の山口貯水池の南岸の草原に生育しているのを1963年5月に発見した。小道ぞいに約 70 m にわたって分布し、ススキ、キンミズヒキ、ヌスビトハギ、フジなどの間に生えている。道の近くでは個体数が非常に多いが、道からはなれると急激に減少する。このあたりは現在、東京都の水道局用地として保護されているが、ヤマザクラの大きな樹が多く、またタチバナモドキが生えていたり、コンクリート製の池があったりして、かつてはかなり人との接触のあった場所らしい。このような状況から考えて、この植物の分布も人為的なものであるかも知れない。（指田 豊）

〇ホソエウリハダ (ホソエカエデ) *Acer capillipes* Maxim. はこれまで群馬県を以て北限としていたが、福島県大沼郡昭和村の目の子湿原周辺にまで北上していることを知った。同地は5万分の1地形図針生の「南会津」の北方である。街道がひどく屈曲する辺に駒止（コマド）峠があり、其の北の小湿原（約 1080 m, 北緯 37° 13'）である。周囲はブナ林であり、其の内縁で歌川義男氏が1963年8月23日に採集された。本種は四国山脈、紀伊山脈、甲信地方の山地から関東に至るが、これで此の襲速紀要素（小泉先生は本種を玖摩関東要素として区別された）が東北地方南部に達することが分った。南会津地方は現世では裏日本気候帯にあるが、北陸地方にホソエウリハダを産するとは知られていない。然し新潟県内陸部の森林植生は南会津から北関東のものと同じ景観であり、基本的に環境条件が異なるとは見えない。但し本種分布域の主体が表日本気候帯内にあることを思えば、往古の分布域の断片がここに表れていると解することも可能である。とすれば前川先生の所謂コウヤマキ型の分布型に当るようであり、それよりも更に地域の重点が東偏したものになると言えよう。即ち現在の分布はむしろ大地溝帯の辺にあり、且つ磐越山地までは北上していないのである。ついでにヤマグルマの分布に一言触れよう。日本海側では福井県から飛んで新潟県飯豊山周辺の山中にあり、北限は岩船郡関谷（セキダニ）村大石のブドウ鼻山（38° 1' 12'' N）である。太平洋側では従来の栃木県から北上、福島県南会津郡西北部のブナ帯山地にも産するが、生態条件からは北陸同様に裏日本地域である。（都立大 牧野標本館 水島正美）